



奶人扱



持

門 凡 4  
 號 4303  
 卷 83



昭和三十年  
 十一月十六日  
 購求

目



目ろふと



二八

目玉深布

徳者日本武尊武臣の河橋姫乃河姫と無きまの  
 多武知國存系郡。あましく淨潔あり  
 うの市社と建て若人神中系ふり。後不  
 善是大師不知乃其像と彫刻し終る人今  
 の目玉不物ならり。実く雲後物也。正二  
 九月の急病あつた廿八日の夜目もれ廿七日は夜中  
 い骨杖のしりなく若者男女村合を合。その  
 こし遊々々々として百を系々々々の教場の道  
 して心とたり。あましく河を渡りて川に  
 の竹んせう残の雪と残し。毫く雪月老の奥ある地きり

下二

神田坐堂



神明田神



里の広く日野野



野々々天變乃將門七らく。其の靈多  
 其とちを一以。極行上人芝崎村  
 新て。其の灵とあけり。神田明神と  
 以めとくや。殊る九月十五日。祭禮  
 なる。其の祭禮あはれ。其の上神田  
 社の中。寸地もあ。見世の土弓酒  
 家茶店。茶販ちや屋。祇園夏萬  
 店えを。軒と形へ。野々々  
 以を其る。

西

阿比山花見



阿比



飛鳥山花尺

表乃いつゆふ本宗なやしおと上野の花をふる  
 りうしつぎや能るれ初見はまうんとく先穂各商  
 こく忍をて邦しそをく。駒也より何をかひうりてを。  
 四方と御かれい水の本芝川は流ゆる中とあたるる  
 とく。芝立乃廣地。目録りごうりて。尾久村の農  
 業氏の電も纏りく。おとちりくひたれ  
 ともさか始をとり。路のく。昔跡の志をうりく。極  
 さもあいのうり。電も。花形も。子に。是なり。色り  
 香りして。香ゆふれ。春の氣をとも。あけあしとどと。  
 是れ永より。流るる。ゆつたれ。り。布り。つ。そ。き。勢

下五

おのゑくせうせお







おちぢいこ





色秋系茅渚

秋を押しどく。づぐもほじ。好乃景急  
 西院寺に紅葉と刀物してまゐりたどりて二本  
 堀を二首うかす。今戸橋を渡りて清茅ヶ系  
 うましく思はせ。そのこ橋家の母如亀と云  
 の傍り。宿乃好。好無常と云今いあり。別院  
 が池の傍り。昔のむき由急を修し。秋の日も  
 を遊ばせ。夕暮りや。うたかたの虫。色ぞ  
 河の無なる。伊予はこれ。雨後乃赤のよき。ち  
 一や。ほろり。筆紙をうらほせ。

山内書目

平安書林

寺町三條上町

菊屋安を湯板

末板



池がこ



下九

下ツカ

